

京都府京田辺市

一休かるたと

一休とんちロード



一休さんと京田辺

とんちの一休さんのお寺として知られている酬恩庵(通称、一休寺)は、もとは妙勝寺といい、大応国師によって創建されたのが始まりです。その後、戦火にかかり荒廃していたものを、一休禅師が1456年に再興し、傍らに庵を結び師恩に報いる意味で「酬恩庵」と命名しました。禅師は、88歳で亡くなるまでの晩年、酬恩庵を住まいとしました。そこで、一休寺がある京田辺市は、一休さんゆかりのまちとなっています。

一休寺

- 拝観時間／9～17時
- 拝観料／大人500円、子ども250円
- 電話／0774-62-0193

一休かるたと一休とんちロード

一休寺までの約600mの道路を「一休とんちロード」として、道中15か所の電柱に「一休かるた」を活用した案内板を設置しています。案内板には、一休さんにまつわるエピソードやとんち話が描かれており、かるたを通じて一休さんや京田辺市の歴史に触れることができます。

一休かるたとは…

一休さんの88年の生涯の一端を48枚の「かるた」として集約したもので、特定非営利活動法人「一休酬恩会」により、一休禅師生誕600年を記念して製作されました。



もう一足延ばして他の見所へもどうぞ

甘南備山

標高221mで「神が宿る場所」という意味を持つ山。京都・大阪の府境にあり、生駒山脈の支峰となっています。



観音寺

国宝十一面観音立像は、天平文化の華やかさを今に伝える柔和な表情が特徴。春には参道の桜並木や一面に広がる菜の花が、秋には紅葉がひととき目を引きまします。
○拝観時間 9～17時 ○志納料 400円
○電話 0774-62-0668



澤井家住宅

曇華院所領地の代官を務めた澤井氏の住宅。入母屋造で茅葺屋根をL字型に組み合わせた特徴的な建物。



- 公開日時／第2・4土曜日 10～16時
- 文化財保存協力金 300円 ○電話 0774-62-0146

寿宝寺

重要文化財である十一面千手千眼観音立像は、平安時代後期の作で、実際に千の手、千の眼があるのは、全国で3体しかないといわれています。

- 拝観時間 9～17時 (前日までに事前予約要)
- 拝観料 300円
- 電話 0774-65-3422



京田辺市の観光案内は

京田辺市観光案内所／京都府京田辺市田辺中央四丁目3-3 京田辺市商工会館1階

電話:0774-68-2810 FAX:0774-68-2817 Email:info@kyotana.be

京田辺市産業振興課／京都府京田辺市田辺80 電話:0774-64-1364

京田辺市観光協会公式ホームページ「京田辺道中記」／<http://kyotana.be/>

iTours京たなべ(スマートフォンアプリ)／APP STORE・Google playにてダウンロード<ダウンロード無料!>



一休とちロード上にある、一休かるたの紹介



一休さん一と休みせず米寿まで
一休さんは後小松天皇と日野中納言の娘・照子姫との間に生まれましたが、宮中を出て波瀾万丈の人生を送りました。八十八歳で亡くなるまでの晩年を酬恩庵で過ごしました。



洛西の民家で生まれし千菊丸
一休さんは応永元年(三九四)正月元旦に、洛西の民家で生まれました。幼名・千菊丸。父は第百代後小松天皇、母は日野中納言の娘・照子姫ですが、母が南朝出身のため皇居を離れて生まれました。



六歳で母と離れて安国寺
応永六年(三九九)一休さん六歳の頃、母の考えで京の安国寺(廃寺)の像外鑑公和尚の許に出家。侍童名を周建と名づけられ十一年間にわたって禅の修行をしました。



追い出せぬびょうぶに描いた虎退治
將軍・足利義満が一休さんを試すために「びょうぶの虎を縛ってくれ」と頼みます。一休さんは縄を持って將軍に「さあ準備はできました。早く虎を追いかけてください」と切り返しました。



笑み浮かべ端を渡らず橋渡る
一休さんのとんちの中でも有名な「端渡り」。「一休さんが来るといって「これは渡るべからず」と書いた札を立てましたが一休さんは涼しい顔して橋の真ん中を渡りました。



説法に氏素性説く僧嘆き
仏法を説く者が「自分は源氏出た」「平氏出た」「藤原氏出身だ」と、つまらぬことを自慢する風潮を嘆いた一休さん。「仏門に入った者は誰もが釈迦の弟子で、みんな同じだ」と言いました。



へつらわずおごることなく庶民禅
権威に対しては徹底して対峙した一休さん。その一方、弱者には人の道を解りやすく説きました。居を定めることなく放浪の僧として、庶民の中で禅を実践した人でした。



話さない秘伝を文字に書き記し
のどの病を治す家伝の療法を、誰にも話さないという約束で老人から教わった一休さん。帰るとすぐに療法を立札に書いて辻々に掲げたということです。



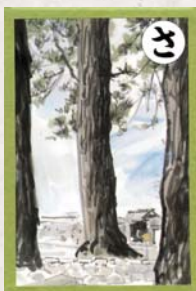
泥水もおどめて使え人心
「澄ませば清き元の清水」と続きます。江戸時代につくられた「一休和尚いろは道歌」の一首。道歌とは仏の教えや道徳・教訓などを詠んだ短歌で、中世より盛んになりました。



親当と丁丁発止の禅問答
蟻川新右衛門、本名は物部親当。武術、和歌、書にすぐれ、將軍・足利義教に仕えて政所代を務めました。夫婦共に「一休さんとの親交が深く、多くの禅問答・道歌問答が残っています。」



袈裟ころもこれも世人の他力なり
「袈裟ころもありがたそうに見ゆれどもこれも俗家の他力本願」一休さんと物部親当(蟻川新右衛門)の道歌問答の二つ。「身につけているもので人の判断は出来ない」という意味です。



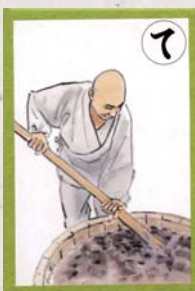
挿した箸 芽が出て根がでて三本杉
一休さん、浄土真宗本願寺第八代の蓮如、室町幕府の政所代で武術や和歌に秀でた蟻川新右衛門こと物部親当の三人が食事をして、その箸を挿したのが三本杉になったと言われています。



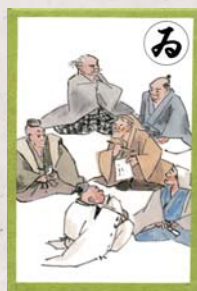
薪村 今に伝える 筵織り
縄を縦糸、藁を横糸とした筵は、敷物・包装・建築材など多くの使い途があります。この筵織りは薪村の生活を支えるために一休さんが教えたそうです。昭和中期まで生産されていました。



檜の笠で 頭が焼けたと子等は言い
薪村の甘南備山で薪を採る子供に「一休さんが藁の火で掌がこけて毛が無い」と言っていると、子どもは檜笠の「一休さん」に火の木で頭が焦げてはげ頭になった」と言ったとか。



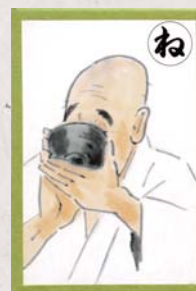
天日干し 納豆は和尚の伝授味
夏の土用の太陽が照りつけ、蝉時雨がひとときわ激しくなる頃、納豆の仕込みが始まります。大豆・麹・塩・塩湯などを原料とし半年以上も天日干にした一休さん伝授の蛋白性保存食です。



居並ぶは薪に集う文化人
一休さんを慕って多くの文人雅客が酬恩庵を訪れました。能の禪竹、茶の珠光、連歌の宗長、俳諧の宗鑑、画の蛇足……と、枚挙にいとまがなく、薪村はあたかも芸術村の感がありました。



金春に酔うは一夜の薪能
観阿弥・世阿弥父子の思想と芸風を伝承し、世阿弥の娘である揚巻の婿となった能楽師・金春禅竹は、一休さんに師事しました。一休寺の門前には、金春禅竹の芝跡や屋敷跡があります。



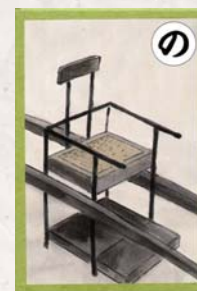
眠気よけ一休珠光の侘び茶かな
村田珠光は大和の寺僧でしたが還俗して京都に行き「一休さん」に師事して禅を学びました。坐禅の眠気さまじに喫茶を教わり茶の湯と禅寺の茶の作法を取り入れ茶道の開祖となりました。



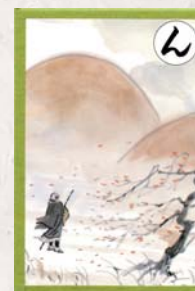
名曲の響きなつかし一節切
「一節切とは一休さんが使っていた尺八のこと、竹の節が二つしかないのだから呼ばれました。この尺八は今も酬恩庵に残っています。また一休さんは「紫鈴法」という曲も作りました。



紫の衣受けても身につけず
文明六年(四七四)一休さん八十一歳のとき、御土御門天皇から大徳寺第四十七世の住持の勅命を受け、紫衣を賜りましたが身につけず、応仁の乱の戦火で焼失した大徳寺を復興しました。



乗った輿 八十一より大徳寺
一休さん八十一歳の文明六年(四七四)、勅命により大徳寺第四十七世の住持に。薪村の酬恩庵から京都紫野の大徳寺まで輿で通い、戦火などで焼失した大徳寺を復興しました。



んがない世を渡り行く風狂子
んは五十音図や、いろは歌の中にはありません。んは「うん」に通じ感動詞。「一休さんは人間でありながら、人間の枠をはずれて生き、いや、人間らしく生き、自らを狂雲と号しました。」